



「華」を篆書体で書いた作品です。意味は、華やぐ、華やかです。最終画が左にぐっと伸びてできた両側の余白を、是非、鑑賞してほしいと思っています。

「還暦」のことを、中国では「華甲」といいます。（「華」の文字は、十が6つと一から成っており、六十一）中国文化に親しい人などが、赤い紙にお祝いの気持ちを込めて「華」と書いたものを目にすることもあります。

この作品は、伊賀市島ヶ原の旧本陣での個展の依頼を受けた時、還暦を迎えたので、迷わずこの文字を書き、会場の中心に飾ったものです。赤い縁回しをしています。

箱書きは、平成二十五年夏 華甲の歳に 早百合かく。

平成二十五年は、生まれた歳（昭和二十八年）と同じ十干十二支の「癸巳」です。



中国 南宋時代に無門慧開が著した『無門関』という禅の本があります。その十二則に、瑞巖禅師の「主人公」のお話載っています。

瑞巖の彦和尚はユニークな方で、高僧でありながら、石に坐して、毎日、自問自答をします。「主人公よ」と自らに呼びかけ、「はい」と応える。次に「惺惺箸（目を覚ましているか）」と自らに呼びかけ「はい、はい」と応える、と続きます。私は、愚直に問いかける和尚の姿に心が動き、「主人公」という語句を書きました。禅の深い意味はあると思いますが、自分自身の人生を主体的に生きること、常に自分らしくありたい、と解釈しています。書体は「金文」です。

禅語ですが、表具は、型苦しくならないように、形式と色を選びました。お茶人さんが好む言葉でもあり、両端の狭い「茶掛け」風です。

箱書きは、戊戌春日（2018年春の日）若草山陰居にて 早百合書く。若草山陰居は、若草山が見える私の書斎の名前です。